

コーチングにおける効果的な質問に関する一考察

—クリスティーナ・ホール博士の

「一般化のプロセスを方向づける質問」を中心として—

加 藤 雄 士

要 旨

本稿では、コーチングなど人材開発の場面における効果的な質問について考察している。質問は単に情報収集するだけでなく、注目の対象に焦点をあてさせ、特定の記憶、リソース、状態（ステート）にアクセスさせ、ペーシングやラポール構築にも使える。又、情報を新しく異なった方法で処理するように誘^{いざな}ったりすることもできる。

本稿では、具体的に、クリスティーナ・ホール博士の「一般化のプロセスを方向づける」質問を取り上げて、効果的な質問の方法と質問の目的について考察する。

キーワード：コーチング (Coaching)、質問 (Question)、NLP、人材開発 (Human Development)、認識論 (Epistemology)

I はじめに

近年、質問と傾聴を中心としたコーチングが人材開発の手法として取り入れられている。質問については、コーチングに関するテキスト、書籍、論文に、拡大質問と限定質問、過去質問と未来質問、肯定質問と否定質問などの種類や具体的な質問集がとりあげられてはいるものの、質問における言葉づかいなど効果的な質問の方法、さらには質問の目的に関する研究が不足している。

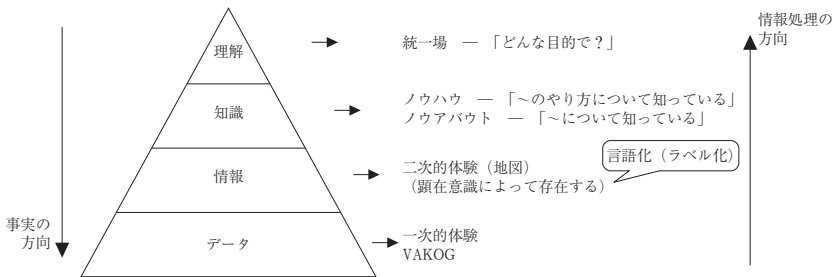
本稿では、コーチングなど人材開発における効果的な質問の方法と質問の目的について考察を進める。特に、NLP（神経言語プログラミング）の開発に関わったクリスティーナ・ホール博士の「一般化のプロセスを方向づける」質問を取り上げて¹⁾、どのような質問にどのような機能が期待できるのかなどを考察する。

Ⅱ クリスティーナ・ホールのリビング・システム（認識論のモデル）

本稿で考察するクリスティーナ・ホールの「一般化のプロセスを方向づける」質問は、彼女のリビング・システムのモデル（認識論のモデル）を体験するように設計されている。そこでまずこのモデルについて概説する。

クリスティーナ・ホール（2008）は、認識のプロセスを、データ、情報、知識、理解という4つの概念を使って、以下のように説明している²⁾。

第1図 クリスティーナ・ホールのリビング・システムのモデル



私たちは感覚的なデータを感じる。つまり、見たり、聞いたり、感じたり、嗅いだり、味わったりという一次的なデータである。このことを一次的体験（プライマリー・エクスペリエンス）と呼ぶ。このレベルの体験は、私たちの意識とは独立して存在している。たとえば、この部屋の中には、同時にたくさんの感覚データ（センサリー・データ）が存在している。しかし、私た

1) クリスティーナ・ホール博士から2018年11月4日に引用許諾をいただいている。

2) クリスティーナ・ホール（2008）29-33頁、169頁 筆者が各文章をつなげた。

ちは、そのデータすべてを自覚することはできず、ただ受け取るだけである。それらは意味を持たず、削除・批判・評価もない。このレベルの体験は「まだラベリングされていない気付き」である。その気付きにラベリングすることによって意味を与える。このレベルの経験を、二次的体験（セカンダリー・エクスペリエンス）と呼ぶ。ここで言語が入ってくる。意識があるからこそ、このレベルの経験が存在し、その経験に「ラベルづけ」でき、「意味」をつけることもできる。ラベルとは、基本的に言語であり「全体性を説明していくための、ある特定（一部分）の現実」、例えば、机の上のコップを「コップ」とも「容器」とも「ホルダー」とも呼ぶことができる。呼び名によって私たちがどのように反応するか、どのように使うのが変わってくる。

そして、単なる情報を組織化し、アウトカムを達成するための行動へと翻訳していく段階が「知識」（ノウアバウト、ノウハウ）である。さらに、アウトカム達成に向けて行動する「理由」つまり、より大きな文脈の中でより深いレベルの目的とつながる段階が「理解」（場を統合、「どんな目的で？」に相当する）である。

Ⅲ クリスティーナ・ホールの「一般化のプロセスを方向づける」質問の考察

本章では、クリスティーナ・ホールの「一般化のプロセスを方向づける」質問について考察していく。

1 「一般化のプロセスを方向づける」質問

クリスティーナ・ホール博士は、以下の一連の質問からなる「一般化のプロセスを方向づける」質問のエクササイズを開発した。その質問文は第1表のとおりである。

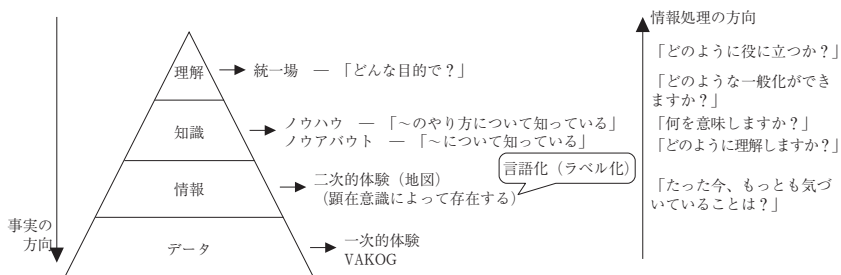
第1表 「一般化のプロセスを方向づける」質問

No.	Q
1	「あなたが、たった今、もっとも気づいていること（見、聞、感、3つずつ）は何ですか？」
2-A	「あなたは、どのようにこのすべてを理解しますか？」
2-B	「あなたにとって、このすべては何を意味しますか……この時点で？」
2-C	「あなたは、このすべてに関して、どのような一般化（複数）ができますか？」
2-D	「そして、このすべては、あなたにとって、あなたのために、どのように役に立つのでしょうか、あなたが未来に入って、未来の中を進んでいくときに……今から始めて？」
3	「あなたは、今まで気づいていなかったことで、今何に気づいていますか？」
4-A	「あなたは、どのようにこのすべてを理解しますか？」
4-B	「あなたにとって、このすべては何を意味しますか……この時点で？」
4-C	「あなたは、このすべてに関して、どのような一般化（複数）ができますか？」
4-D	「そして、このすべては、あなたにとって、あなたのために、どのように役に立つのでしょうか、あなたが未来に入って、未来の中を進んでいくときに……今から始めて？」
5-A	「より大きなこの環境と関係して、あなたは今どのように異なったしかたで注意を集中していますか？」
5-B	「あなたは今どのようにこの環境と関わっていますか？」
6	「このすべてが、どのようにあなたの経験を豊かにしますか？」

2 「一般化のプロセスを方向づける」質問とリビング・システムのモデル

「一般化のプロセスを方向づける」質問の1から2-Dまでの質問を第二章で概説したリビング・システムのモデルにあてはめると以下ようになる。

第2図 クリスティーナ・ホールのリビング・システムのモデル



3 「一般化のプロセスを方向づける」質問のデモンストレーション

クリスティーナ・ホールが、セミナー³⁾の中で行ったこの質問のデモンストレーション（回答例）の一部を紹介する。第1表で紹介した質問に下線を引き、質問番号を書き入れた。

クリス 「たった今、もっとも気づいていること（システムの例：見、聞、感）は何ですか？」（質問1）

クライアント（以下 C1） 「みなさんの顔です。」

クリス 「他にはどうでしょうか？ ビジュアル（視覚）・レベルのものを挙げてくれますか？」

C1 「花を見ています。」

クリス 「花に関連して、どのようなことに気づいていますか？」

C1 「花瓶です。」

クリス 「その他には？」

C1 「フリップ・チャートです。」

クリス 「みなさんの顔と、花瓶と、フリップチャートが見えているのですね？」

C1 「……」（頷く）

クリス 「違うシステムでもっとも気づいていることは何ですか？ 聴覚か体感覚か？」

C1 「耳の冷たさです。」

クリス 「その他には？」

C1 「ほっぺたの温かさ。」

クリス 「他には？」

C1 「胸にかかる圧力の強さ。」

クリス 「胸のところに緊張を感じるのですか？それをどのように表現され

3) クリスティーナ・ホール「言語プログラミング」セミナー（2010年9月27日～10月2日、東京）

ますか?」

C 1 「胸の温かさです。」

クリス 「あなたが感じるのは、耳の冷たさと、ほっぺの温かさと、胸の温かなのですね?」

C 1 「……」(頷く)

クリス 「聴覚的なシステムでは、何を聞いていますか?」

C 1 「空調の音です。」

クリス 「その他には?」

C 1 「ペンの音。」

クリス 「その他には?」

C 1 「通訳さんの声。」

クリス 「あなたがここに立っておられながら、一番見えているのは、みなさんの顔と、花瓶と、フリップチャートですね? そして、あなたが一番感じているのは、耳の冷たさと、ほっぺの温かさと、胸の温かなのですね? そして、あなたが一番聴こえているのは、空調の音とペンの音と通訳の声なのですか?」

C 1 「……」(頷く)

クリス 「あなたは、どのようにこのすべてを理解しますか?」(質問2-A)

C 1 「……ワークショップの中にいる。」

クリス 「あー、ワークショップの中にいるのですね。あなたにとって、このすべては何を意味しますか?……この時点で?」(質問2-B)

C 1 「……学習。」

クリス 「学習を意味するのですか?」

C 1 「……」(頷く)

クリス 「あなたはワークショップの中にいらっしゃっていて、これらすべては、学習を意味するのですか。そして、あなたは、これらすべてに関して、どのような一般化をすることができますか?」(質問2-C)

- C 1 「楽しい時間。」
- クリス 「他につけ加えることは？」
- C 1 「人間の営み。」
- クリス 「もう少し言ってくれますか？どのような意味あいですか？」
- C 1 「進化です。」
- クリス 「他に付け加えたいことはありますか？」
- C 1 「ありません。」
- クリス 「あなたは、ワークショップの中において、これらすべては学習を意味していて、これに関して、楽しい時間、進化と一般化します。
そして、このすべては、あなたにとって、あなたのために、どのように役に立つのでしょうか、あなたが未来に入って、未来の中を
進んでいくときに……今から始めて？」（質問 2-D）
- C 1 「自信。」
- クリス 「自信。他には？」
- C 1 「リソースの拡大。」
- クリス 「他に付け加えたいことはありますか？」
- C 1 「いいえ。」
- クリス 「あなたは、今まで気づいていなかったことで、今何に気づいて
いますか？」（質問 3）
- C 1 「安心感。」
- クリス 「安心感をどのように感じていますか？ 視覚的なことですか、体感的なことですか？⁴⁾」
- C 1 「胸の軽さで感じます。」
(デモンストレーションでは、以下のプロセスは省略され、質問 5-A から再開された。)

4) 「安心感の『感』は、感じるという動詞で、感覚システムからいうと曖昧です。視覚的に感じるのか、聴覚的に感じるのか、体感的に感じるのかを確認する必要があります。」とクリスは話した。

- クリス 「より大きなこの環境と関係して、あなたは今どのように異なったしかたで注意を集中していますか?」(質問5-A)
- C1 「個別のものがつながって知覚するようになりました。」
- クリス 「フォーカスが、つながりの方に入ったわけですね。あなたがこことつながっているということですね。あなたは今どのようにこの環境と関わっていますか?」(質問5-B)
- C1 「境目が薄くなったような感覚です。」
- クリス 「それはあなたにとって、どのようなことを意味していますか?」
- C1 「オープンになって関わっているような感じです。」
- クリス 「そして、このすべてが、どのようにあなたの経験を豊かにしますか?」(質問6)
- C1 「愛を感じながら生きるというような……。」

以上がデモンストレーションの内容である。クリスティーナ・ホールが何度もクライアントの発言をバック・トラックして(繰り返して)つなげることが特徴的である。感覚情報の質問からスタートし、チャック・アップの質問を繰り返し、クライアントの応答をバック・トラックすることにより、一定の方向に一般化させている。

IV 「一般化のプロセスを方向づける」質問の考察

ここでは、クリスティーナ・ホールの「一般化のプロセスを方向づける」質問文について、彼女自身のセミナー⁵⁾における解説に筆者の解釈を入れて考察していく。

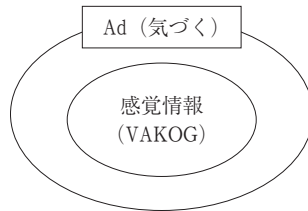
1 1の質問について

「たった今、もっとも気づいていることは何ですか?」という質問1によ

5) クリスティーナ・ホール「言語プログラミング」セミナー(2010年9月27日~10月2日、東京)

り、クライアントはチャンク・ダウンしていく。具体的には、「気づく」という聴覚デジタル⁶⁾の不特定動詞に対して、クライアントは感覚的な（特定の）記述を回復するよう具体化（チャンク・ダウン）していく。

第3図 聴覚デジタル（Ad）と感覚情報（VAKOG）

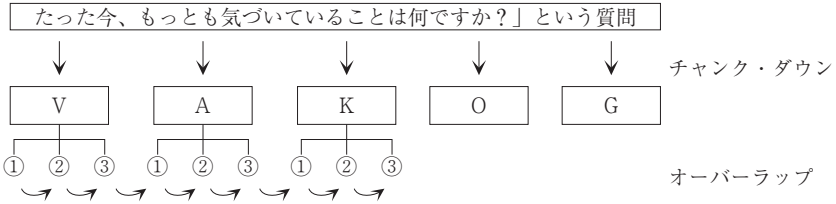


また、感覚情報（サブ・モダリティ⁷⁾には連続性があり、「もっとも」という言葉が入る（「もっとも気づいていることは何ですか？」と質問することによって、クライアントは様々な感覚情報を検索し、その中で「もっとも」強いものを選びとる。このように1つの質問にいくつかの前提が入っており、クライアントはその前提を無意識のうちに受け入れて情報処理をする。

「花瓶が見えます。」とクライアントが発話すれば、「その他に何が見えていますか？」と、他の視覚情報について聞き、3つの視覚情報が聞きとれたら、別の感覚器官の情報を聞きとっていく。そして、クライアントの感覚情報をバック・トラックする（繰り返す）ことによって、オーバー・ラッピングしている（第4図参照）。

- 6) 「気づく」というのは、NLPで「聴覚デジタル（Ad）」と呼ぶ叙述語で、VAKOGの五感情報がチャンク・アップされ、より大きな動詞である「気づく」にネスト（入れ子）構造になっている（第3図参照）。また、「気づく」というのを、NLPでは「不特定動詞（非参照的叙述語）」とも呼ぶ。
- 7) サブモダリティについては次のように説明されている。「私たちは、代表システムと呼ばれる感覚モダリティを通して、知覚されたインプットをコード化し、秩序立て、保管し、意味づけている。各代表システム内の知覚組織は、従属要素（サブモダリティ）と呼ばれるさらに小さな個別の単位によって構成されている。ある体験をすると、それは従属要素のレベルでコード化され、保管される。」(Christina Hall, 2007, p. 21) また、サブモダリティは全て連続性だとクリスティーナ・ホールは話した。デジタルには間がなく、アナログには動きがある。例えば、次第に温かくしていく。さらに温かくしていくと、ある段階で、違うラベルになるとセミナーで話した。

第4図 「たった今、もっとも気づいていることは何ですか？」という質問1について⁸⁾



2 2-A、B、C、Dの質問について

2-A、B、C、Dの質問で、クライアントは、今度はチャンク・アップしていく。具体的には、2-Aの「理解」に関する質問でチャンク・アップし、2-Bの「意味」に関する質問でもチャンク・アップし、2-Cの「一般化」の質問でさらにチャンク・アップする（チャンク・アップとチャンク・ダウンのイメージは、第5図参照）。2-Cの「一般化」の質問では、いくつかの一般化を聞きとり、感覚的要素の一般化をリフレーム（意味づけを変更）していく。全ての感覚的な体験は意味に対しては曖昧なため、いくつもの一般化が可能となる。

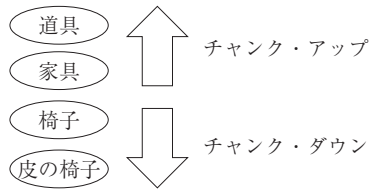
2-Aから2-Dの質問の「このすべてを（を／は／に関して）」という言葉で、これまでの質問と回答全てを含んだものについてチャンク・アップを繰り返し、「アンカー」⁹⁾をつみ重ねていく。NLPでは、これを「スタッキング・アンカー」という（第6図参照）。また、チャンク・アップすることで、より多くのものを含むようになり、入れ子構造（ネステッド・ループ／大きなカゴの中に小さなカゴが入っているような構造）になる（第7図参照）。逆にチャンク・ダウンすると、中に含むものが少なくなる。

このように答えを積み重ねることで、これらの質問をする前とは違う方向に注意を向けさせ、その方向に対する激しさを増すことができる。つまり、

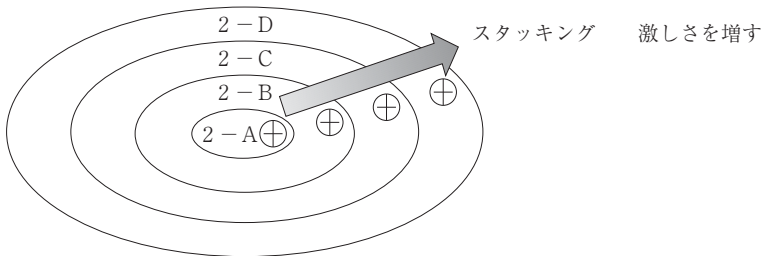
8) Vは視覚、Kは体感覚、Aは聴覚、Oは臭覚、Gは味覚を表す。

9) 「アンカー」とは、日本語で錨（いかり）を意味するが、NLPではアンカーが引き金となって、特定の感情や反応を引き起こすことを指す。

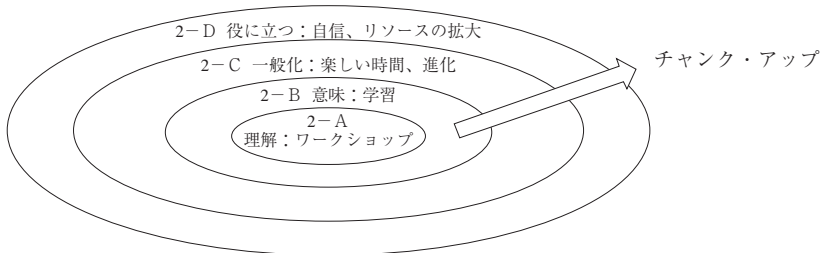
第5図 チャンク・アップとチャンク・ダウンのメタファー



第6図 スタッキング・アンカーのイメージ



第7図 2-A、B、C、Dの質問のネステッド・ループ構造の例



クライアントの注意を望ましい方向に向けさせ、その強さを増していくことで、別の方向に向かう力を軽減できる。

また、2-A、2-C、2-Dでは、「どのように／な」という表現で質問している。「どのように／な」と聞くことでプロセス（動きを伴う）に焦点をあてさせる。さらに、2-A、2-Bでは、「理解」「意味」という不特定動詞を使って質問することで、クライアントにそれらの動詞について特定

的な記述を検索させる¹⁰⁾。

3 2-Dの質問について

2-Dの質問では「このすべては」「どのように役に立つの」が質問している。これは、それまでの質問の回答の全てをより大きな文脈の中で、より深いレベルの目的へとつなげる質問であり、クリスティーナ・ホールのリビング・システムにあてはめると「理解」レベルに相当する（第2図参照）。しかも、「あなたが未来に入って、未来の中を進んでいくときに……今から始めて？」という表現をすることで、クライアントはいったん自分の未来の道程をイメージをし（スルータイムで時間を捉えて）、そのイメージとつなげて、今、どのように役に立つのかを考えるようになる。それにより、今のこの瞬間が未来のアウトカムのイメージとつながっている（現在地と未来のアウトカムとの間に橋がかかる）ことがイメージできる。

4 3～6の質問について

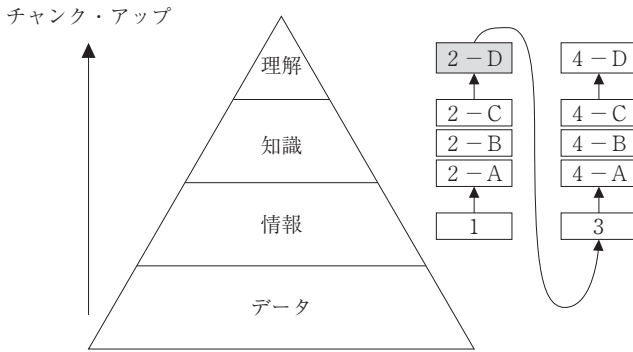
2-Dの質問に答えた後で、「あなたは、今まで気づいていなかったことで、今何に気づいていますか」という質問をする。第8図を見ても分かるように、2-Dの質問で「理解」まで到達し、思考の方向が強固につくられている。その方向性に沿って（その参照枠を使って）、情報検索していくため、感知するものも、ラベリングの仕方も1回目と変化することが多い。

クリスティーナ・ホールはこの第2ラウンドの質問（3から4-Dまでの質問）をする理由について次のように話した。人は、お気に入りのシーケンス（順番）で感知する傾向（例えば、V→K→Aという順番）があり、順番を変えたとき（例えば、K→A→V）に、別のことに気づき、結果として

10) 不特定動詞とは、「何が起こったのか、感覚器官に基づいた描写をしない動詞のことをいう。この動詞を使う目的は、聞き手に意味を埋めてもらうこと」（オコナー、セイモア、1994、140頁）である。また、「理解」「意味」という聴覚デジタル（Ad）と呼ぶ叙述語を使っている。これらがどのように行われるかを知る必要があり、副詞が必要になる。そこで「どのように／な」という具体化させる質問をしている。

異なったふるまいが生まれる。言い換えると、その順番によって意味づけをしているため、順番を変えることで意味づけが変化し、考え方、行動の柔軟性が生まれる。こうした変化を確認するのが、5-A、5-B、6の質問である。

第8図 質問とリビング・システム (2)



V 質問の目的からの考察

本章では、まずこの質問の目的についてクリスティーナ・ホールの発言¹¹⁾を紹介し、続いて「質問の目的」について考察する。

1 この質問の目的

クリスティーナ・ホールは、「一般化のプロセスを方向づける」質問をコーチングでよく使っていたが、これらの質問を終えた後に、クライアントは「何が問題だったか覚えていません。」とか、「自分には、リソースがあるんだと気づいた。」と話したという。特定の感覚情報に異なった意味づけをすることで、以前にかかえていた「問題」は消えてしまったものと考えられる。彼女は、この質問はリビング・システムのモデルを体験するプロセスであり、

11) クリスティーナ・ホール「言語プログラミング」セミナー（2010年9月27日～10月2日、東京）

その目的は、観察能力に関して気づきを高め、考え方の柔軟性を高めていくことにあると話した。

2 質問の目的からの考察

クリスティーナ・ホールはこのセミナーの中で、「全ての質問は、方向設定である。聞き手に考え方の方向性を与える質問には沢山の機能があり、その目的によって定義されるべきである。」と話し、質問の目的について以下の6つを紹介した。

第2表 質問の目的

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 情報を収集する。 2 注目の対象に焦点をあてる。 3 記憶、リソース、状態（ステート）にアクセスする。 4 意識と無意識のプロセスを同時にパーシングしていく。 5 ラポールを構築する。 6 情報を新しく、異なった方法で処理する。 |
|---|

この質問の目的と今回の「一般化のプロセスを方向づける」質問とを突き合わせて考察する。今回の一連の質問では、感覚情報（第1表の質問1, 3からチャンク・ダウンした情報）や、それらの情報からチャンク・アップした情報を集めている（情報収集）。そして、「たった今、もっとも気づいていることは何ですか？」という質問によって、様々な感覚にアクセスさせ、それらの中で最も強い感覚を意識化するように誘っている（注目の対象に焦点をあてる）。また、「どのように役に立つのでしょうか？」の質問も、その方向に注目の焦点をあてるように誘っている。前述のチャンク・ダウン、チャンク・アップをさせる質問も焦点をあてる注目の方向に焦点をあてさせている。そして、それらの質問に回答していくことで、クライアントは、おのずと特定の記憶、リソース、状態（ステート）¹²⁾にアクセスする。既に紹介したデモンストレーションを読んでもわかるように、質問者は回答者の発話し

12) NLPでは、「状態（ステート）」は、身体的なもの、精神的なもの両者を含んでいる。

た内容を繰り返す（バック・トラックする）ことで意識的なプロセスをペーシング（ペース合わせ）している。また、実際のデモンストレーションでは、クリスティーナ・ホールは回答者の声のトーン、スピード、表情、姿勢など非言語の部分でも合わせて（ペーシングして）おり、無意識的なプロセスも同時にペーシングしている。質問とは単に言葉の使い方だけでなく、言葉の発し方、聴き方も含めて考察する必要がある。そして、これらの意識と無意識のプロセスを同時にペーシングしていくことで、クライアントとラポールを構築することが期待できる。さらに、複数の一般化をさせることで情報を異なる方法で処理するように誘っている。また、未来の中に入ったり、未来の中を進んだり、今の時点に戻って前（未来）を見せて質問することでも、情報を異なる方法で処理するように誘っている。質問3でもう一度、感覚情報を尋ねることで、感覚情報の種類やシーケンス（V→K→Aという順番が、K→A→Vという順番に変わることもある）が変わり、情報が異なった方法で処理されることもある。

このように、質問は「疑問点やわからない点を尋ねる」という目的だけでなく、様々な機能を果たす。特にコーチングではクライアントの情報収集、注意の方向、情報の処理の方法の方向設定をする目的を持つ。また、クライアントにペーシングし、ラポールを構築する手段にもなる。その際にどのような言葉を使うと効果的か、どのような質問の仕方をするかといった点についても今回の考察で一部明らかになった。

VI おわりに

本稿は、コーチング（などの人材開発の場面）における効果的な質問の方法と質問の目的について考察してきた。具体的には、NLPの共同開発者の1人であるクリスティーナ・ホールの「一般化のプロセスを方向づける」質問を取り上げて、どのような質問がどのような機能を果たしているか考察してきた。

第Ⅱ章では、まず一連の質問の前提となっているクリスティーナ・ホール

のリビング・システムのモデルについて紹介した。まだ言語化されていない無数の感覚「データ」の一部が意識化され、言語化されて「情報」になり、それらがチャンク・アップされて「知識」になると説明した。さらにそれらの知識より大きな文脈の中でより深いレベルの目的へとつなげた段階が「理解」である。

第Ⅲ章で考察した「一般化のプロセスを方向づける」質問はこのモデルに沿って構成されている。最初に「あなたが、たった今、もっとも気づいていることは何ですか？」という質問により、感覚「データ」を言語化させ（「情報」レベル）、それらを「どのようにこのすべてを理解しますか？」「このすべては何を意味しますか？」「どのよう一般化できますか？」などの質問で「知識」レベルにチャンク・アップさせる。さらに、「どのように役に立つのでしょうか？」という質問で、より深いレベルの目的につなげてチャンク・アップさせる（「理解」レベル）。

実際に、セミナーの中で、クリスティーナ・ホールが実施した「一般化のプロセスを方向づける」質問のデモンストレーションも紹介し、質問を1つずつ取り上げて、その言葉づかいに注目し、その意図を考察した。質問には様々な前提が入っており、その前提をクライアントは無意識のうちに処理して回答せざるをえない。また、質問の順番や、クライアントの回答をつないで（バック・トラッキングして）質問していく方法についても考察した。そうした方法で、クライアントは思考（一般化のプロセス）を一定の方向に向けるようになる。さらに、質問はその言葉だけでなく、質問の仕方、例えば、声のトーン、話すペース、間合い、聴く側の表情、姿勢なども重要であることを指摘した。

続いてこの一連の質問を、クリスティーナ・ホールの「質問の目的」と突き合わせて考察した。質問には、情報収集だけでなく、クライアントが注目の焦点をあてる方向やクライアントが情報を処理する方向を決めるという目的もある。また、クライアントが特定の記憶、リソース、状態にアクセスすることへと誘う目的もある。さらに、意識と無意識のプロセスを同時にペー

シングし、クライアントとの間にラポール構築が期待できる。より効果的なコーチング（人材開発）をしていくために、どのような質問をどのようにしたらよいのかという研究テーマはさらに考察の余地がある。クリスティーナ・ホールは「言葉の魔術師」といわれているとおり、質問に様々な前提を入れた効果的な質問の手法を多数開発しており、さらに研究を進めたいと考えている。

（筆者は関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授）

（参考文献）

Christina Hall (2007), *Art Of Training Manual* (邦題『芸術としてのトレーニング』テキスト), The NLP Connection.

加藤雄士 (2018) 「ピラーの形成・変容に関する一考察 —クリスティーナ・ホール博士の手法を中心として—」『ビジネス&アカウンティングレビュー』21号 関西学院大学経営戦略研究科。

クリスティーナ・ホール (2008) 『クリスティーナ・ホール博士の言葉を変えると、人生が変わる—NLPの言葉の使い方』(株)ヴォイス。

ジョセフ・オコナー、ジョン・セイモア著、橋本敦生訳 (1994) 『NLPのすすめ 優れた生き方を開く新しい心理学』(株)チーム医療。